

エマソン研究序説 (1)

—『アメリカの学者』序文にみるアメリカ精神的独立革命の意義—

伊藤 淳

I 時代の到来を告げる最大の独立宣言&講演

エマソンの処女作『自然論』は、純粋な書物の形で発表されているが、それ以降に発表されたものは講演を中心としながら書物化されたものが主になってくる。翌年には『アメリカの学者』(1837年)を発表するが、これは当時のアメリカで行われていた青年教育のための講演会の一環で、大評判を呼んだ講演をもとに著された書物である。次いで翌年、ハーヴァード大学神学部上級学部で行われた『神学部講演』は、賛否両論、たいへんな物議をかもした講演となった。この三つの思想表明によって、エマソンは良くも悪くも時の人となる。

中でも特に『アメリカの学者』は、その場に聴衆として参加していたロウエルが、「精神的な意味での独立革命」であると言っている。

エマソンというと、全思想を通じてアメリカに独立革命をもたらした人というイメージがあるが、それをもしひとつの講演、一書に象徴させるのであれば、この『アメリカの学者』が圧倒的な感化を与えたと言えるだろう。当時これがどんなふうに見られていたかということ、ロウエルの回想録の中に次のようにある。

「ピューリタン革命は、我々に宗教的な独立をもたらした。しかし、我々は、社会的精神的には、イギリスの思想という波止場に繋がれていた。ところが、エマソンが大策を断ち切ったため、我々は、青々とした大海原に乗り出し、華々しい冒険を試みることができるようになった」(ジェームズ・ラッセル・ロウエル『我が書斎の窓』より)

同様にホームズは、「我々にとっての知的独立宣言」と言っている。これは、かつてなかったほどの「前代未聞の大事件」(ロウエル)であったわけである。

この精神的独立革命というのは、わたしたちの観点からすると、アメリカがベンジャミン・フランクリンを中心に制度的な意味で独立をし、イギリスの頸木を断ち切り、

そして1815年には米英戦争に勝ち抜いて、どこから見ても一個の独立国になった、と同時に、西部フロンティアがどんどん拡がり、1803年にはルイジアナ州をフランスから買収するなど、政治的にも経済的にも破竹の勢いでアメリカは大発展している。アメリカが世界のトップに向けてどんどん領土を拡張しているのは、神に認められた天命なのだ、というように、非常に高らかに自国の発展の息吹の中を謳歌していた。その一方で、精神的にはどうであったかという、まさに現代の日本と同様に、経済は一流になり、諸外国から注目されるような大きい存在にはなっていたのだが、ひとりひとりの国民の気概という点では、自分たちはナンバーワンにはとてもなれない、とりわけ、いちばん大事な精神性・文化・芸術においては、当然のことながら伝統がないわけであるから、ヨーロッパに学ばなければならない、そうしたある種のコロニアル・コンプレックスがあったと言える。それは、先に挙げたロウエルの記録からもそのように見て取れるし、またさらにそれは明治以降の日本が抱えている問題と非常にパラレルになってくる。

そうしたものを断ち切る、ということは、普通であれば長い伝統や歴史の積み重ねのなかで徐々に自信を獲得していくものであるが、このエマソンのように、歴史精神・世界精神・時代精神を体現するような際立った思想家が出てくると、ある象徴的な事件、とりわけ政治的な事件が起こることが多くある。しかし、そうした政治的な事件をも凌ぐ大事件が起こった。それが、この講演『アメリカの学者』であった。

むろん、旧守派の人、古い体制を守ろうとする人々は、猛烈に反発をした。しかし、当時の知識人のほとんどが、この問題を避けては通れないくらいの強烈なインパクトがあったのである。

諸々の精神的革命が行われるとき、精神的支柱となっているところの宗教性に対する因習や、伝統的な教義に対してぶつかっていくことは当然のことであるわけだが、それは翌年の『神学部講演』において詳しく言及されている。これもまた同様に大変なインパクトを与えたのであるが、この論文ではいわゆるエマソンの三部作と言われるうちの、一番エポック・メイキングでもある『アメリカの学者』を扱っていきたい。

II 本論文の立場

このように、アメリカの精神史において、この『アメリカの学者』という講演は決定的なメルクマール、エポック・メイキング的な出来事となったわけであるが、なぜ

そのようなことがありえたかということ、エマソンの個人的な歩みが、同時にアメリカの精神史・世界史的な流れとパラレルになっていたからである、ということが言えるだろう。そしてこれが、世界精神を担っているという人の特徴である。

アメリカの建国における制度改革を行ってきたベンジャミン・フランクリンの歴史を見ると、彼の個人的な成長が同時にアメリカの制度史の展開になっていた。制度面における図書館史、大学史、紙幣制度をつくったのは彼だったわけだが、アメリカの精神的な自立という観点においては、エマソンにも同様なことがいえるだろう。したがって、エマソンの個人の歴史を見ることで、アメリカがどのようにナンバーワンの自覚を持って行ったかということを確認することができるのではないだろうか。

そして、エマソンが登場してきた当時のアメリカと、状況的にアナロジカルに非常に酷似しているのが、現代の日本である。

「これだけ技術や経済の力が強く、世界からも注目され期待されているにもかかわらず、精神的には責任を取ろうとしない」と言われている今の状況の中で、我々日本人にとって、エマソンの精神ほど必要なものはないのではなかろうか。

本論文では、このエマソンの思想の核になる部分を浮き彫りにし、特に現代の我々の精神的状況を検討しつつ、我々にとって本当の意味で精神的な独立を得るということはどういうことであるかということを考えてみたい。我々が実際に置かれた状況の中で、過去や諸外国に追随するのではなく、未来を創造していくための素材とする、そのためのよすがにしたいのである。

殊にこのような態度は、いわゆる学問的・文献学的な態度とは非常に対極的であるため、通常の意味での学者の立場とは異なるという見方もあるかもしれないが、この論文に関しては、こうした態度は避けて通ることができない。なぜならば、この『アメリカの学者』におけるメッセージには、現代の日本においても顕著に見られるような学問的・制度的な常識やスタイルというものに対する、「異種申し立て」という意味での学問論を内包しており、それは我々に「真の学者とは何か」という問いを突きつけずにはいられないからである。すなわち、エマソンの核心的な講演・著作を読み解く際には、その思想のエッセンスに忠実になる限り、我々に狭い意味での学問的・傍観者の立場を超えて、全人的・主体的な態度をとることを要求するのである。

したがって、殊にこの講演に限っては、エマソンの同時代にとってのみならず、現代に生きる我々にとっても、魂の覚醒を促す挑戦のメッセージであり、それはちょうど、2400年前のソクラテスの弁明におけるメッセージを喚起させる。当時のギリシ

ヤ人に向かって、「アテナイ人諸君よ、あなた方は、こういうところに目覚めるべきではないか」といった、ソクラテスの血を吐くような演説が、当時のギリシャ人に向けてのみならず、現代の我々への挑戦になっていることと、非常に通じている。その挑戦に対して、どのようにレスポンスするかが、我々の課題に他ならない。そのような点を踏まえ、この講演について掘り下げていきたい。

そして、これは歴史的事実として言えるのであるが、ひとつの講演なり研究発表が、なぜ世界精神を担うのか、ということの研究する価値は大いにあると言える。言ってみれば、単なる観念が、なぜここまで民衆の気持ちを捉え、影響力を持ち得たのか。同じような素材を使ったあまたある研究発表・講演の中で、なぜこのエマソンの講演だけが、時代精神を変えてしまうくらいの強烈な感化力を与えたのか。その「核」の部分に、普遍的価値があるのではなかろうか。その当時の歴史的状況がどうであるか、思想の流れがどうであるか、ディティールの論点はあるだろうが、そのポイントをこれから扱ってみたい。その観点から、この『アメリカの学者』という論文を追ってみたいと考える。

Ⅲ 『アメリカの学者』の構成

エマソン『アメリカの学者』は、序に続いて、一部、二部という章立になっている。本論文では、このうち「序」を扱うこととする。

- 序 1) 精神的な独立宣言文
2) 「全人」(Man) の寓話
3) 「真なる学者」(Man thinking) cf・墮落した学者 (a thinker) との対比

この序に関しては、最初の講演で端からそれを聴く者たちを捉えて離さないような、「よくぞ言ってくれた」というような魂を驚つかみにするキャッチがあった。エマソンは最初に通り返一遍の挨拶をしながらも、早速本題に入る。最初の数行で脳天を直撃するような一言から入っていくのである。これが、最初に言った「精神的独立宣言」といわれるような内容になっていく。ここで聴衆が感動に打ち震え、一気に最後まで聴いていったのである。

序文の後半部分において、この講演の全体の基調テーマとなるところの、「Man」

(全人)の思想について、寓話を用いながら語っている。この全人の思想から、エマソンが考えるところの「真なる学者 (Man thinking)」について、分かりやすく縷々説明していく。これに基づき、聴衆に向けて「皆さんは墮落した学者でなく、『真なる学者』になりなさい」というメッセージを訴えていく。

ここで言う学者とは、必ずしも学問研究に従事する人のことではなく、牧師や作家など、いわゆる精神的階級とも言うべき、知識人、知識階級全般の識者、言論人全般、自分が知に携わると思っている人——あえて言うならば、あらゆる職業における人は、その中核においてその職業に対して理念を持っていなければならない、という意味においては、すべての人が該当されている——。よって、全アメリカ人に告ぐ、というメッセージであり、さらに言えば「全人類に告ぐ」というようなメッセージにまで繋がっていくであろう。(フュヒテの「ドイツ国民に告ぐ」のように)

また、後にその内実を見ていくが、学者というのは狭い意味での限定された学者ではない。

これに基づき、一部と二部に分かれ、二段構えで講演が展開されていく。

i 「真なる学者」になるための三要件・教育論

- 1) 自然 (自然論) —前年の『自然論』(特に5「訓練」)の内容の凝縮バージョン
- 2) 書物 (精神論) —同時に学問論、学問方法論、内在的な因習批判を内包(現代のアカデミズム批判にも通じる)
- 3) 行動 (経験論) —これをアメリカ行動主義哲学(プラグマティズム)の淵源と観る論者(斉藤光)もいるが、ここでは、むしろ全人(Man)の理念の完結と見るべきだろう。学者論の文脈で、「行動論」を転回をするところが、きわめてユニーク。

第一部であるが、これはエマソンが主張するところの、偽学者ではなく、「真なる学者」になるためのその方法論、教育論が展開される。どうすれば真なる学者になれるのか、その要件を満たすポイントを、上記の三つに分けて論じている。

一つ目の「自然論」においては、真なる学者は自然を研究しなければならない、ということであるが、この講演の中では割合あっさり済ませている。というのは、すでにエマソンは『自然』という、彼にしてみればかなり長編の論文を発表しており、

特にその論文の中の第五章「訓練」——自然が人間をどのように教育していくか——というテーマのエッセンスを、今回は少しバージョンアップして語っているということがあるからである。

二つ目は「書物」についてである。自然からのみではなく、精神、歴史における偉人からも学ばなければならない、ということである。たいていの場合は書物からの学びとなるわけであるから、この部分に学問論が入ってくる。どのように過去の伝統、学問と付き合いしていくか、ということだ。実際、我々が学問といっても、一から自分の哲学思想などを発表する学者はほとんどいないわけであり、従来の学問をどのように研究し、どのように受容していくかという点で、これは現代の研究者すべてに当てはまるテーマであろう。それに対してエマソンは、先の「全人」の思想から当然の帰結として、非常にダイナミックなメッセージを聴衆に対して発していくのである。

そして、三つ目は非常に興味深いのであるが、学者というとは行動しない人の典型であるようなところが定説であるが、(現代の日本にしてもそうであるが、当時アメリカでもそうであった。その典型としてエマソンは牧師を挙げている)、そうではなく、学者が真の学者になるためには、経験や行動が絶対に必要不可欠なのだ、ということである。(この経験や行動の意味については、後記することにする)少々余談になるが、この部分を取って、従来の研究者は、エマソンが持っている観念主義や行動主義はアメリカの主流にはならなかったけれども、後にジェームズに代表されるようなアメリカの行動哲学、採算が立つか立たないかというような合理主義という、良くも悪くもアメリカを代表するような思想は、ここから生まれたのだというふうに言っている。ただ、エマソンにおける行動という意味は、現代で考えるところのプラグマティズムよりも遥かに、非常に哲学的に含蓄の深いものであると筆者は考える。よって、必ずしも精神的な系譜でエマソンを読んでもしまうことは、筆者としては面白味に欠けるのである。結果として、アメリカの行動主義は、エマソンの提示する行動に対する、ある意味で形骸化されたスタイルかもしれない、というふうに思われるのだ。

この三つが、真なる学者になるための要件であるということである。

ii 「真なる学者」の使命 (義務)

- 1) 「真なる学者」が払うべき代償 (試練) と報い——『代償の法則』の萌芽
- 2) 自己信頼の徳目としての自由と勇氣
- 3) 現代の迷妄 (大衆化社会) と偉人論——1849年「代表的偉人論」の萌芽

4) 未来創造物語、「アメリカの学者」とすべての未来を待望する民族への応援歌

第二部では、第一部で提示した三つの要件を踏まえ、ではそれを基にして世の中に對してどのような義務を果たしていくべきか、ということを読んでいる。真なる学者——自分が知において自負心を持っていると思う人——は、人間としてどのような使命を果たして行かなければならないのか。そのことを当時の聴衆に對し、非常に熱く語っているのである。

ここは特に章や節があるわけではないのだが、便宜上四つの節に分けることにする。

一つ目は、真なる学者が払うべき代償とした。その使命を果たして行くためには、どうしても試練を経なければいけない、ということであり、それはその使命に組み込まれているということである。代償を払わなければならないということだ。これは特に、同じような悩みを抱えている学者がほとんどであると思うのだが、非常に励まされるメッセージである。

二つ目は、その代償の試練を乗り越え、次に要求されるのが、自由と勇気であるということだ。自己信頼の徳目としての自由と勇気である。これは、この第二部全体に自己信頼というテーマが流れているのだが、とりわけこの二つ目の節に凝縮させているという点で、ここにそのテーマを置いた。

三つ目は、翻って現代の大衆社会の迷妄についてである。当時のアメリカのことはあるが、これは今の日本にも当てはまる。一人一人が非常に卑屈になってしまい、その他大勢になってしまっているという大衆社会の状況に對し、エマソンはそれを憂いつつも、処方箋を出していく。(さらにこれは後年の著書『代表的偉人論』(1849年)の萌芽となるような思想となっている)

そして、それらを前提として最終的には四つ目、「未来創造物語」(筆者の言葉)に繋がっていく。「アメリカ人よ、未来を築いていけ。それだけの歴史的使命を担った民草なのだ」ということを聴衆に訴えていくわけである。

では、実際にアメリカ人は、エマソンの訴えたメッセージを真正面から受け止めたかどうかということについては、明確な尺度があるわけではないが、少なくともこう言うことはできるかと思う。ここで言われているところの「精神的独立革命」という契機がなければ、今のアメリカは、経済大国にはなりえたかもしれない。が、かつてのカルタゴやオランダのように、体力はあるが精神的に自分が世界をリードしていくのだ、という気概は持ち得なかったであろう。少なくとも、アメリカのリーダーたち

が決定的に日本の政治状況と異なるのは、(それが傲慢であろうと何であろうと、) 自分たちが地球の、世界の運命に対して責任を持っているという意識があるところではないか。これはアメリカ史上のどこかの時点において、そうした自覚を持ったはずだと思われるわけである。それを探っていくと、あるときからじわじわと浸透してきたというのではなく、やはりここでの宣言がきっかけとなっていたことは間違いないのではあるまいか。その中で、一番大きなエポック・メイキングである、アメリカ人のナンバーワンになった結果ではなく、自分が、奴隷根性、植民地的意識、文化的なコンプレックス等を脱却していく、というその契機に関しては、非常に普遍的な学びの価値があるのではないかと思うのだ。そのような点を、特にこの「未来創造物語」において共有してみたいとも思っている。

IV 序文の意義

これ以降の章は、上のラフマップに従い、順番にそれぞれのテーマについてひとつひとつ章立て、それに沿って検討していくかたちにしたい。

1) 独立宣言

この発表は、1837年8月31日、ボストンのファイ・ベータ・カッパ協会という学術振興会においてなされた講演だった。

エマソンは最初、一般的な挨拶を終え——これから私が発表するのは、ギリシャ人のように詩歌の競争をすとか、現代のイギリス人のように科学の促進のためにするものではなくて、忙しい現代人においても学芸に興味をもつ習慣があるのだということを、この学会において皆で確認するもので、今までの過去はそうでした、と最初に挨拶をした。そしてその後、いきなり端から独立宣言を突き上げる。今までのように、流れに沿った発表ではなくて、今日は本人の自覚のなかで、歴史的な精神革命宣言をしよう、という気概に満ち、(それは実際その通りに受け取られるわけだが) 独立宣言文を打ち立てたのである。エマソンは次のように話し始めた。

「おそらくこの記念祭は、従来どおりのものではなくて、新しい意義を持つべきであり、またそうなることでありましようが、その時がすでに来ています。この

アメリカ大陸の怠惰な識者が、その重いまぶたをあげて、機械技術のもたらす恩恵よりも勝るものをもって、長くアメリカにかけられてきた期待を、遅ればせながら満たす時がやってきたのであります。我々の非常に長きにわたった外国依存の時代、外国の学問に対する我々の長い徒弟時代は、今終わろうとしています。」
(斉藤光・訳)

彼は、こう宣言することによって、伝播的な植民地状況をこの瞬間脱せようとしているのだ、という非常に果敢なメッセージを、聴衆の皆に突きつけたのである。

同種のメッセージで「新しい文化の息吹が、今アメリカのなかで続々と起ころうとしているのだが、その新しい生命に対して、古いイギリスやヨーロッパの中核の残り物で養っていくことは、もう到底できない。新たにその意義や唱をうたうべき事件がこれから次々と起こってくる」と彼は言った。そして「豎琴座の星座の星のように、今ここで宣言されるようなメッセージは、後々1000年にわたって新たな北極点になるだろう。本当の詩が復活して、これから新時代が招来してくるであろうことを、誰が疑うことができましょう」と、非常に意気浩々たる意見を発したとき、潜在的には同じ想いをくすぶらせていた聴衆は、常々このように思っていたはずだ。「自分たちにはかなりの力がついているのにもかかわらず、なぜヨーロッパの文化に対して、言ってみれば奴隷意識・植民地根性を持たねばならないのか。この鎖を誰か断ち切ってくれないか。願わくば自分が断ち切りたい！」と。

その瞬間を捉えて、エマソンがこのような直球メッセージを発したのであるから、皆は相当なショックを受けたわけである。

これが、序文における「独立宣言文」の部分である。

それを受けて、ではそこからどのように話を展開させていくかということ、一見、無縁と思われるようなところから、エマソンは話を掘り下げていく。それは、古代ギリシャ人の寓話だった。

2) 全人の寓話

研究者の間では、プラトンの『饗宴』におけるアリストパネスの神話——本来の人間は男と女を兼ねていたが、作業分担のため男女に分化したという話がある。これがどうも伝統にあったと言われているが、これを筆者は「全人の寓話」として考案した

い。

この内容としては、最初はトータルな意味において大文字の「Man」があった。これはもちろん、生物的・歴史的なことではなく、象徴的な表現である。その「Man」が、それぞれの機能に応じて様々な機能分担、役割を持つところの「men」に分かれた。つまりひとりの人が農夫をしたり、音楽家をしたり、詩人や建築家などいっぺんにやることはできないから、本来ひとりの人がやるようなことをそれぞれ分担して、ある人は建築家になり、ある人は大学教授になり、ある人は詩を書いたり、ということがあり、そこで「men」に分かれたという。ただそれだけの寓話なのではあるが、この講演がこの後ずっと展開していくに従って、この意味が非常に深まり、決定的なインパクトを持つようになる。

この機能分業に関しては、奇しくも 1776 年、アメリカ独立宣言の年に、歴史を変える一書が書かれている。アダム・スミスの『国富論』である。この書の第一章、開口一番に書かれてあることは、これから生産性を何百倍と上げていくためには、この分業というものを徹底する必要がある。たかだかねじをひとつ作るだけでも、絞る人、削る人等、分業することによって、10 倍どころか 100 倍も生産性が上がるのだ、と指摘している。

古代的なレベルでの分業もあるが、特に現代の産業資本が展開していく、新しい近代の発展の理念において、この分業ということは非常に決定的であるのだが、そのあたりと非常にコントラストを成すようなかたちで、この「全人論」をエマソンは語っていくわけである。

この分業論の発展のモデルを学問研究に応用して制度論までに高めたのが、職業としての学論であり、(マックス・ウェーバー等)、もちろんその善し悪しの面はあるわけだが、とにかく現代において、この風景というのは、どのような立場にあらうと、エマソンが言うところの大文字の「Man」と「men」(これは一人の人と複数の人という意味ではない)に当てはまる。

それはちょうど、ひとつの手のひらが、それだけだと物が持てないから、5本の指に分化することによって作業ができるということを表す。これは大変に大事なことである。ただ、後々、縷々出てくるように、この親指や人差し指というものが、手のひらという「Man」によって統合され、全体として一貫した行為を成すことにより、初めてひとりひとり(ひとつの指たち)が意味を持つ。これのみをもってして独立というのではないわけだが、もちろん現代の風景で誰もがそう感じるように、現代社会の

典型的な風景は、この作業分担、細分化が行き過ぎた結果、「こぼれ落ちた雫がもとの水に還らないように」、本来の人間としての、「Man」としての、自分がそこから出たところの本来の統一性、全人的性格を、見失ってしまったのだ、という。

また現代の人間のほとんどの悩みは、簡単に言ってしまうと、淵源はこういうところにあるのではないかと思われる。

エマソンはいろいろ理解しやすい譬えを挙げているが、たとえば「農場主は、農夫になりさがり、農場における一人の人間ではない」。これは、農場主は、人間のある一部を担って、食物を農場に集めるのが本来の仕事だったのだが、自分が分化された仕事の方にすべての意識を集中させてしまっているものだから、人間であることを失って、単なる“農夫”という役割になってしまっている、ということの意味する。さらにエマソンは、商人は自分の商売以上の利益の査定などの問題で汲々とするあまり、いつしかドルの召使になっている、牧師はといえば、儀式の奴隷となり、弁護士は法令の、技師は機械の奴隷となっている、と畳み掛ける。

このエマソンからのメッセージとは、ひとりの農夫というのは、農夫である前に、農場におけるひとりの人間なのだ、ということである。言ってみれば非常に簡単なメッセージだ。この「人間とは何か」というところは、特に深い規定があるわけではない。ただよく誤解されるが、この全人というのは、ひとりで何でもできるというルネッサンス的な万能人への理想を語っているものではない。これはごく自然なコンセンサスに訴えているのだ。(最近、ある青年企業家と話をする機会があり、「あなたは青年企業家で素晴らしいですね」と言うと、「いや、僕は企業人である前にひとりの人間でありたい」と言って詩を書いていました。そういう五感ですね。) 自分は学問を研究しているけれど、学問を研究することが人生の目的ではなくて、あるひとりの人が、人生の目的に寄与するために、学問に特化してやっている。その本来の目的、手段、連関というものを失ってしまった場合、現代人は非常に病的な状況になるが、特にそれが一番典型的に表れているのが学問の世界だ、ということが、後に表記されている。

後に記述する「真なる学者」になるための要件という部分にも対応してくるのだが、筆者が類型化したものとして記述すると、この全人「Man」の理念の中には、無限性、主体性、全体性といった理念が見て取れる。単なる機能ではなく、人間であると言える条件には、そうしたものがある。これが、本論文における議論の前提になってくる。

この部分に関しては、学問的にどう位置づけられるかという類の様々な議論はある

だろうが、ごく普通のセンスにおいて言わんとしていることは理解できると思われるので、その部分は特に新味があるわけではないであろう。しかし、興味深いのは、「Man」と「men」の構図をそのまま学者にも当てはめていくというところだ。「では、このような観点に立ち、本来の学者というものは何であろう」というテーマを出してくるわけである。

3) 真なる学者とは何か

エマソンは、単なる学者というものについて、「このような配分をする場合、学者は識者（知的探求を代弁する者）の代表です。」と言う。皆の代わりにやっているということである。ではそれと異なる「本来の学者」というのはどういうものかと言うと「Man thinking」（考える人間）であるという。先述した農場におけるひとりの人間、という意味と対応しているが、要するに、思想家という役割があるのではなく、ひとりの人間がいて、それがたまたま考える、という仕事をしている。学者である前に人間なのだ。そのことを悟っている学者のことを「Man thinking」であると言っている。本論の中では、これを筆者の呼び方として「真なる学者」という言葉で展開していきたい。この意味においては、先の2)の考察から当然帰結されることであるから、すっきりと理解できることと思われる。

逆に、人間であることを忘れてしまい、墮落した状態、先の農夫の例で言えば、ひとりの人間ではなく、単なる農夫になっているという状態、そうした状態において、思想家に当てはめて言うと「a thinker」という。その墮落した学者という部分が、象徴的に提示されているのだが、後にエマソンが考えた現代の学問批判すべてに直結している。学者が普遍的に抱えているいろいろな問題があるであろうが、——行動できない、象牙の塔に籠もっている、情操がない、等々——特に現代の学問に対する批判が、非常なインパクトを持って大きく効いてくる。

この序で提示されたテーマ自体は、近代的な懐疑等についてもほとんどなく、非常に素朴でシンプル過ぎるほどであるのだが、それが展開されたかたちにおいては、圧倒的な感化力になっていくのである。

この区別は、「アメリカの学者」という講演において、いわばライトモチーフになっている。最初は何気ないかたちで変奏し、鳴り響いていくのだが、繰り返し繰り返し繰り返されていくにしたがって、(ちょうどベートーベンの交響曲のように、)最後は圧倒的

なインパクトをもって感動が迫ってくるのである。